

シャークハンター

人とサメの狭間で生きるために

おいがっお

海時―I

朝食に使った食器を洗い終わった富士宮甲呀は、タオルで手を拭いた後、キッチン棚の戸を開けた。

戸棚の一番下の段にある、ココア袋を取り出す甲呀とす、とココア袋をキッチン台に置く。

「あつと、カップ取ってこなきゃあ」

先ほど使った食器の中で唯一洗っていなかったマグカップは、奥の食卓の上に置きっぱなしにしてある。そいつを手に取りキッチンに戻る途中、彼は応接室の方を見やった。

そこでは歯磨きを終えた一人の青年が、身支度を整えている。

「……少し、嬉しそうだな」

青年に向かつて、甲呀はそう言った。

甲呀に話しかけられた青年は、外出用バッグに財布を入れる手を止める。

「そう、見えますか」

「顔に出ているからな」

一見、眉の角度も口角も、普段とさして変わらぬよう

に見える青年であるが、甲呀にとっては違ったようだ。

「海時の表情もさ、だんだんわかるようになってきたんだよ、俺も」

甲呀はキッチン台にマグカップを置いた。

ココア袋にスプーンを突っ込んだ甲呀は、スプーン山盛り二杯分、マグカップにココアの粉をひっくり返す。

粉の量は、袋に書かれている一杯分のそれよりも、やや多めである。

彼は袋のジッパーをぴっちり閉め、キッチン棚に戻した。

「いいことだぜ。嬉しいときにはしっかりと笑っておけ」

「……はい」

ちらりと見える、キッチンに立つ甲呀に目をやった青年――清水海時は静かにうなずいた。

海時の返事を聞いた甲呀は、電気ケトルからカップにお湯を注ぎ始めた。チョコレートの香りと共に、立ってくる温かい湯気。

甘い匂い。

「……」

荷物をかばんに入れ終えた海時は、事務所の時計の方へ顔を上げていた。

「師匠。そろそろ俺は出発します」

「お、もう九時前か」

冷蔵庫の戸に手をかけていた甲呀であったが、一度海

時のいる応接室に向かう。

「忘れ物はないか？ あんまり相手の親御さんに、迷惑かけるなよ」

「はい」

師匠の言葉に返ししながら、海時はバッグを肩にかけ、事務所の扉を開けた。

「では、行ってきます」

「おう、行ってきな。楽しんで来いよ」

保護者めいた眼差しで、甲呀は唯一の弟子を見送った。

「……さて。俺もブレイクタイムとしゃれこむか」

一人になった甲呀は、また冷蔵庫の前に戻り、扉を開けた。目的は冷蔵庫上段、端っこに鎮座するホイップクリームである。

半分彼専用ともいうべきホイップクリームを掴み、甲呀は絞りのキャップを開けた。

画竜点睛。朝食後のお楽しみのためには、これが欠かせない。

ホカホカと湯気を立てるココアの上に、ホイップクリームがソフトクリーム状に絞られていく。

手慣れたもので、わりあい見栄えの良い形の白色の渦巻きが、茶色のココアの上にふんわりと乗っかる。

「よおし、できた」

富士宮甲呀お手製、ウインナーココアの完成だ。

甲呀は自分のデスクに座り、ココアをコースターの上

に置いた。チョコレートとホイップクリームのダブルパンチココアは、とても甘そうだ。

そんな淹れたてのココアを、甲呀が一口。

ズズズ……

「……ほう」

ココアをすすする彼は、幸せそうなため息をつく。

朝に飲むウインナーココアは最高だな。

富士宮甲呀は根っからの甘党であった。

## 鯨狩—I

ウエノシテイ。世界シャーク大戦によって壊滅寸前にまで陥った日本を支えるために巨大化していった、世界でも有数の規模を誇る都市である。

二十四時間、ウエノシテイの賑わいは収まるどころを知らない。夜には都市全体が発光しているかのように錯覚させられるほどだ。それは例えるならば、海底に暮ら

す人造巨大生物、アンコウ・クラークンも顔負けの発光具合である。

有象無象の田舎町では到底拝むことのできぬような、大きなビルもウエノシティの特徴の一つだ。

そんな都会を象徴するウエノシティのビルの一つ、その駐車場へと入っていく自動車があった。

黒い自動車である。自動車の側面には、オオナミ・コーポレーションの社章。

自動車は、曇った星空から身を隠すように、地下駐車場へと降りていく。

ウエノシティ以外の住民が見れば、まるで迷路のようだと形容するであろう、広い地下駐車場だ。

だが、オオナミ・コーポレーションの自動車に迷いはなく、適切なスピードを保ちながら駐車場の奥へと進んでゆく。

「ニボシー」

自動車のハンドルを握るカプセルニボシは、運転訓練を行った、いわばプロニボシドライバーなのだ。

人造生物でありながら、彼の運転技術は自動車免許八段に匹敵する。

運転手がそのような良い人材であったので、ニボシの後頭部を眺めるリングリングも、ここに来るまでの道中、ゆったりとくつろいでいた。

快適なドライブであった。

彼は座席にかけてあるLサイズボトルのピュア・コーラを掴み、すすった。

ピュア・コーラはとても高価な飲み物のはずだ。それをいともたやすく飲んでいる。

間違いない！ 彼は高給取りだ！

それもそのはずである。思い出していたきたい。この車に描かれてあった社章を。

リングリングは、かのオオナミ・コーポレーションに所属しているのだ。

オオナミ・コーポレーションは、ウエノシティで知らぬ者はいないほどの大企業。一般労働者があくせく働いて手に入れる一カ月の賃金など、オオナミ・コーポレーション社員にとってはあぶく銭に過ぎぬ。

一律に蛍光灯が並ぶ地下駐車場を走る、オオナミ・コーポレーションの自動車。

「……ん？」

リングリングは窓の外を見やった。

「止まれ」

「ニボシー」

リングリングの指示を受けたカプセルニボシは、車のブレーキをかけた。

ピュア・コーラボトルを戻したリングリングは車から降り、

「おい、そこのお前」

駐車場の一角で段ボールにくるまった男に近づく。

「ひいっ」

リングリングにすこまれ、男は震えた。

「ここで何をしている」

男を見下ろすリングリング。

「あの……外が寒いんです」

穴の開いた服の男は答えた。

「家もないんです。一晩でいいから、雨風をしのげる場所がほしくて……」

このように、残酷にも社会から弾き出されてしまった人間は、ウエノシテイには少なくない数、存在している。

ウエノシテイは大都会であると同時に、弱肉強食のコンクリート・ジャングルでもあった。

「ほう、外が寒いのか」

「はい」

哀れな男は段ボールを抱いたまま、返事をする。段ボールには、にこやかな顔が描かれた二つのミカンの絵と〈すごいミカン〉という文字があった。

「ならば、仕方がないな」

肩をすくめたリングリング。

「あ、ありがとうございます……」

男は感謝の言葉を述べようとして……口をつぐんだ。

目の前のオオナミ・コーポレーション社員の様子に異変を感じたからだ。

「お前。もはや二度と寒いなど感じぬようにしてやろう。喜べ」

その言葉と共に、リングリングの姿が変わっていく。

見よ。彼の全身を覆っていくのは、前半身に大きな金色の輪、そして両腕にも二つの金輪がデザインされた戦闘服である。

どことなくサメを彷彿とさせる戦闘服。

「サツ……!!」

浮浪者は目を見開いた。

全身を伝っていくのは、恐怖の二文字。

「サメエエエエエ！」

なんとたることか！ ビルの地下駐車場でサメに出くわしてしまったのだ！

「ハッハー!!」

悲鳴を上げる浮浪者へ、リングリングの鋭いチョップが迫る。

シャークスーツを身に着けたリングリングの正体は、シャーク因子を宿した超人シャークノイド。

サメの力を宿した攻撃を、一般人がまともに受けられるはずもない！

「サメエエエエエ！」

恐怖に歪んだ表情のまま、浮浪者の右肩が切断！

彼の抱いていた段ボールがベコリとへこみ、にこやかなミカンの顔が折れ曲がる！

「ハッハー！」

リングリングのさらなるチョップ！

「サメエエエエエ！」

今度は浮浪者の左肩が切斷！

段ボールがさらにへこみ、〈すごいみかん〉の文字が真っ二つとなる！

倒れる浮浪者。

「ワハハ！ そのまま死ぬ！」

次はどこにチョップをしてやろうかと考えるリングリングであったが、

「サ、サ、サメエエ……！」

彼が攻撃を加える前に、サメに出くわした恐怖と出血により、哀れな浮浪者は息絶えた。

それはリングリングにこれ以上痛めつけられないことを意味しており、下手に生きて悲鳴を上げ続けるよりは幸運だったのかもしれない。

「……ふうー」

リングリングは思わぬ殺人ができたことに喜ぶ。こういうことがあるから、現場仕事は面白い。

「目撃者を消すためだからな。仕方がない。うむ」

欺瞞的な言い訳をしながら、わざとらしく首を縦に振るリングリング。

彼は腰のベルトポーチから、灰色のしなびたピンポン玉のようなものを取り出した。

ニボシボールである。

ニボシボールのボタンを押し、リングリングがそれを放り投げると、たちまちのうちにボールは膨れ上がっていく。

「ニボシー」

そして、卵から稚魚が孵るように、カプセルニボシがボールから現れた。

「そのゴミを片づけておけ」

生まれたばかりのカプセルニボシにそう言いつけたリングリングは、車のバックドアを開けた。

「ニボシー」

ニボシは肅々と掃除用具を取り出し始める。この自動車には、いざという時のための死体掃除セットを常備しているのだ。

カプセルニボシがブラシを片手にしたのを見て、リングリングは再び車に乗りこむ。

ビジネスの前にストレス発散ができて、彼はご機嫌であった。

## 海時―II

富士宮探偵事務所近くのバス停に、海時はたたずんでいた。

此度の海時の目的地は、富士宮探偵事務所から、徒歩とバスを使って五十分ほどの距離にある。

バス停の時刻表を眺める海時。無感動な様子の彼だが、親しい者であれば、少々そわそわとしているのが見て取れる。

「……」

遠方から聞こえてくる、大型車のエンジン音。

午前九時四分、時刻通りの市営バスがやってきた。

海時は停車したバスへと乗りこみ、整理券を取る。

残り少なくなっていた空席に、海時は座った。

「……」

静かな時間であった。海時はバスに揺られながら、ぼんやりと外の風景に目を向けている。

周囲に高い建物が壁のように並び、視界をシャットアウトしているため、ウエノシテイの道路は実際以上に入り組んで見える。

幾度も道を曲がりながらバスは進み。

移り変わってゆく景色。

窓の外に現れては後方へと消えて行く、〈あなたの人生〉〈コシ深きうどん〉〈冷えアイス〉などの看板。

ブロボロボロ……という、しめやかなバスのエンジン音が、海時の耳を無造作になでる。

時おり車両が止まり、そのたびに入れ替わる人影。

おしゃべりをしているのは、いつの間にか乗っていた中学生たちだろうか。エンジン音しか聞こえていなかったバスが、少しだけ騒がしくなっている。

特に話し相手のいない海時は、車内の電光掲示板をちらと見る。ペカペカと流れているのは〈交通事故に気をつけよう！〉の文字。

大概の高校生は退屈と評するであろう時間であったが、海時はこうした穏やかな一時が好きだった。

昔からそのきらいはあったが、血と汗とフカヒレにまみれた日々を送るようになってからは、特にそうだ。

やがてウエノシテイ東部を抜けたバスは、都市郊外であるウエノシテイ西部へと入っていった。

こちらの方が住宅地が多い。地価が安いからだ。

地面から生えた長方形の結晶のようなガラス張りのオフィスビルも、この辺りになるとさっぱりなくなる。

少しだけ視界が利くようになった景色を、やはり海時は眺めていた。

「……」

おもむろに袖をまくり、腕時計を確認した海時。

バスに乗って、もうすぐ四十分だ。

ということは、そろそろ。

「……」  
再び窓の外に視線を戻した海時の瞳に、かつての母校の姿が映った。

「……………」  
バスが高校を通り過ぎるまで、その校舎をじっと見つめる海時。

この場所に……故郷にやってくるたびに、海時の胸は苦しくなる。

彼に去来する思いは、はたしていかなるものなのか。海時はバスのボタンを押し、次のバス停で降りることを伝える。

目的地に着くまで、まだ少し時間はある。イスに座ったまま、海時は軽く伸びをした。

バスが完全に止まった後、立ち上がった海時。すでに右手には、乗車料金びつたりの小銭が握られている。

彼は整理券と小銭を投入し、運転手に軽く頭を下げ、バスを降りた。

もうすぐで旧友たちに会える。

幼いころから知っている道を、海時は歩き始めた。

もう、あいつの家に行くのは何度目になるのだろうか。

小、中学生のころは、しょっちゅう三人で遊んだものだ。高校生になってからは、頻度は減ったが。

だが、あの忌まわしき事件が起きてからは。

自分が遠くに行つてからは、顔を合わせることも、ほ

とんどなくなつた。

だから、今日この日は。自分がサメとなつてしまふ以前の、かつての生活と同じような一日を過ごせる日であつた。

## 鯨狩―II

目撃者を必要以上に痛めつけて始末したリンググリングの乗った車は、(G)のマークが書かれた柱の近くにまでやってきた。この駐車場は広いので、アルファベットの書かれた柱によって、利用者が迷うのを防いでいるのだ。

入り口から二番目に離れた場所にあるアルファベット

(G)地点をさらに過ぎ、最奥の(H)付近が、今回の取引場所である。

こんな人目に付かない場所で行う取引など、何かよからぬモノをやり取りするに違いない。そう思いの方も少なくないだろう。

安直だが、実際その通りであつた。

違法経口麻薬アゲ・バタ。摂取するとバタ―中毒に陥り、何度も服用すると最終的には血中成分のほとんどが毒性違法バタ―に侵<sup>おか</sup>される、恐るべき薬物。

オオナミ・コーポレーションは、危険なアゲ・バタを買い取るために、地下駐車場へとやってきたのだ。

これはオオナミ・コーポレーションが公にはしていない、裏の顔――すなわち、暗黒サメ組織としての活動である。

「……？」

指定の場所、〈H〉のマークの柱が見えてきた時、リングリングは違和感を覚えた。

「いったん止まれ」

「ニボシー」

ふんわりとブレーキを踏むドライバーニボシ。

リングリングは車のドアを開け、取引場所を遠くから見つめる。

「おかしいな」

取引相手がいない。

いつもなら十分前には待機している、優良な常客なのだ。

「ここで待っている」

カプセルニボシに車を任せたりんぐリングは、ジリジリと〈H〉の柱に接近する。

……まさか約束を破ったのか？ およそ考えづらいこ

とだが。

しかし、そうであったのなら、後日尋問<sup>じんもん</sup>をする必要がある。

とはいえ、今は約束の時刻の三分前。待っていれば、相手も来るやもしれないな。

リングリングが待機を選択した、その時。

……バリエイン

突如として、ガラスの砕け散る音がした。

背後からだ。

「ニボシーッ！」

それとほぼ同時に上がる、カプセルニボシの悲鳴。

「なんだ！」

振り返るリングリング。

「……！！」

そこには――地獄のような光景が映し出されていた。

数十秒ほど前にリングリングが乗っていた車のボンネットにいたのは、片膝立ちをした一体のシャークノイド。

蛍光灯でうす暗く照らされた青銀の怪物の右腕に、何かが掴まれている。

（あ、あれは……！）

シャークノイドが持っていたのは、自分をここまで連れてきた、運転手カプセルニボシの首。



咄然！ どこからか侵入してきたシャークノイドは、右腕でフロントガラスを突き破り、そのまま運転席のニボシを縊り殺していたのだ！

「……」

青銀のシャークスーツを身に着けたシャークノイドが、死亡したカプセルニボシをそのまま片腕で車から引きずり出す。

巣穴に隠れた獲物を無理やり引きずり出し、喰らおうとする、凶暴な捕食者のごとく。

なすがままにされるニボシの運転キャップが、ガラスの破片の上に落ちた。

息をのむリングリング。

——ぐるり。

サメの首が回り、双眸がリングリングに向けられた。

生気をなくしたニボシの首根っこを掴んだままのシャークノイドと、目が合う。

「……オオナミ・コーポレーションのシャークノイドだな。シャークネームは……リングリングか」

シャークスーツの胸元〈Ring ring〉の文字を見た青銀のシャークノイドは、ニボシを放り捨て、リングリングに言い放った。

「買い物帰りの足がなくなったな。だが、もはや貴様には必要がない」

シャークノイドがボンネットの上で立ち上がる。

「なぜならば、俺がここで貴様を狩るからだ」

リングリングを見下ろし、鮫狩宣言。

「……何者だ？」

最初こそ度肝を抜かれたものの、リングリングはすぐに警戒態勢を取った。

素早く相手のシャークスーツの胸元を確認する。

そこに書かれてあった名は。

「——我が名はシャークハンター……サメを狩る者だ」

### 海時―III

「お前―っ！」

中型テレビを前にして、三人の高校生があぐらをかいていた。

「そこで十二マス進むのは許せねえ―っ！」

テレビに映っているのは、数人で遊ぶことのできる、

パーティすごろくゲームの画面である。

これは単なるすごろくではなく、お金やアイテムを使

い、ゲームを有利に進めることができる戦略性をウリにしており、小さな子供からお年寄りまで楽しめるゲームとして評判なのだ。

ゲームは中盤。手番は高校生三人のうちの一人、清水海時。

彼はサイコロを二つ一緒に振れるアイテムを使い、出した目は両方も六。

海時のコマである黄色のアライグマが、テクテクとすぐろくマスを走る。

「ああ……」

パー。パカ。パー。パー！

アライグマが虹色のマスに止まり、貴重なアイテムを手に入れた時のファンファーレが鳴る。

バンザイをするアライグマ。

ファンファーレ終了後、虹色のマスは平凡な青マスへと戻った。

このアイテムを手でできるのは、マスに止まった先着一名だけなのだ。

「海時い！」

先ほどから叫んでいたのはこの家の住人である、渡利大悟。三人の中では物理的にも比喩的にも、最も声の大きな存在だ。

「てめーサイコロ二個振って六ゾロ出す確率知ってるか？」

「三十六分の一だろう」

「そうだ。それを一発で出した海時を、おれは許さん」

「悪いな。運の問題だ」

大悟の右隣に座った海時の口調は淡々としていながらも、口元はほんのりと緩んでいる。

「じゃ、次は僕の番だね」

海時の反対側、大悟の左隣に座った小室ハレが、二人の話を聞きながら、床に置いていたコントローラーを握った。

海時、大悟、ハレは、小学校からの付き合いを持つ三人組であった。

同じ小学校に入学した彼らは、中学校も同じであり、なんと高校も同じ場所に入學した。

本来ならば、同じように高校卒業をするはずであった三人だった。

「最近はどうなんだ、海時？」

漁夫の利戦術でハレが一位をもぎ取ったゲームが終わり、三人はポテトチップの袋を開けていた。

「……そう、だな。つつがなく過ごしている」

海時が乾いた喉を潤すべく、リンゴジュースのボトルを紙コップに傾ける。

「師匠のおかげだ」

「そっか。よかったな」

大悟がポテチをつまみながらそう言った。

「海時ってさ。今は通信制の高校に行ってるんだろ？」

「ああ」

「どんな感じなんだ？」

「どんな、と言われてもな」

海時は頭をかいた。

「基本的には家にいる。たまに学校に行って、課題をや  
って、単位……卒業資格のようなものを取る、といった  
ところか」

「ふーん」

自分から質問しておいて、特に興味がなさそうな返事  
を、大悟は返した。

「大変そうだな。おれなんて、授業がなかったらずっと  
遊んでるぞ」

「だろうね」

ハレが口を挟む。

「でも、海時は真面目だから、そんな心配ないんじゃない  
い？」

「……まあ、な」

初めは、別に通信教育を受けるつもりもなかった。サ  
メさえ減ぼすことができれば、他はどうでもよかった。  
だが、そう言ったら師匠に叱られた。

「いいか、勉強はちゃんとやれ。もし高校に行かないな  
ら、俺はお前のサメ狩り活動を許さん」

そんな師匠からのお言葉もあり、海時は通信制の高校  
に改めて通い直すこととなったのだ。

「だが、やはりあの教室が恋しくなる時はある」

海時はチョコレートの包みを開ける。リンゴジュース  
を飲んだ後のビターチョコレートは、やけに苦く感じた。

「……寂しくはなるのだ」

彼が自身の感情をこれほど素直に口にするのは、この  
二人の前か、あるいは師匠の前くらいなものであった。

「そりゃあ……」

「……うん、そうだよ」

大悟とハレは言葉につまってしまった。  
かける言葉が見つからない。

「……すまない」

「いやいやいや、お前が謝ることじゃねえよ」

大悟が手をブンブンと振る。

「ほら、食べ食べ」

パーティー開きをしたポテチの袋を、海時の方に押し出  
す大悟。海時は彼に礼を言い、少し欠けたポテチを口  
入れた。

「……ねえ、二人とも」

ハレがテレビを指差しながら、

「そろそろ、もう一戦やろっか」

そんなことを言った。

「お、よしきた」

大悟は再びゲームの電源を起動する。

「次は勝つてやるからな」

「かかってきなさい」

海時の前に、コントローラーが差し出された。

「ほら、海時も」

「……うむ」

そうしてまた三人、テレビの前に横一列で並んだ。

「ルールとマップは？」

「マップだけ変えようぜ」

「僕アクアマリンがいいなあ。あそこ好きなんだ」

「海時は？」

「俺もそこがかまわん」

「オッケー」

大悟がカチカチとボタンを押し、ゲームをセット。

「ゲームスタートダツ」と電子ボイスが流れ、三人のキ

ャラクターである、アライグマ、サイ、豆柴がふりだし

マスに現れた。

「そういえばさあ」

自分のコマである豆柴の手番を迎えたハレが、ポテチ

を口に入れながら、二人に尋ねる。

「この前ちよっと考えたんだけどさ。鉛筆削りでカツオ

ブシを削ったら美味しいのかなあって」

「急になんだ」

「だってさ、鉛筆削りを削った後のカスって、カツオブ

シに似てるじゃん？ 実験のスケッチ用の鉛筆をゴリゴ

リしてた時に、出たカスを見て思ったんだ」

「……」

じつくりとハレの言葉を考えた海時が、一言。

「……言われてみれば、カツオブシに似ているかもしれ

ないな」

「でしょ？ ならさ。大きなカツオブシを買ってきて、

鉛筆削りに突っ込んでゴリゴリ回せば、いい感じに削れ

ないかなって。きつと豆腐の上に乗せたらおいしいよ」

「絶対鉛筆の芯の味がするぞ、それ」

大悟がウエットティッシュをつまみ、ポテチの油で光

る指を拭いた。

「そりゃカツオブシ入れる前に鉛筆削りは洗うよ」

「ああ、まあそうだよな……ん、待てよ」

大悟が何かを閃いたようだ。

「カツオブシがいけるなら、シウウガとかも鉛筆削りで

下ろせないか？」

「おお！」

すばらしい発想だと言わんばかりに、ハレが声を上げ

る。

「じゃあワサビとかもいけそうだね。大根おろしとかも

頑張ればいけるんじゃない？」

「……ひよつとすると、葉味はすべて鉛筆削りで作れるのか？」

生真面目な顔で海時が言ったが、

「ちよつと待った」

それを制したのは大悟だった。

「小ネギはダメそうだぞ。あれは削るタイプの葉味じゃない」

「なるほど。葉味界のイレギュラーか」

「そう聞くと、なんかかつこよく見えるね、小ネギ」  
くだらぬ会話だ。

一週間もすれば忘れてしまうであろう内容の会話。

しかし海時にとっては、そんな無意味な会話に費やす時間ですら、大きな意義のあるものだった。

旧友たちとのひと時は、己のシャーク凶暴性を……魂の内に宿るイワシの殺意を和らげてくれるものだから。

### 鮫狩―III

ビルの地下駐車場では、常人であれば泡を吹いて倒れ

るほどのシャーク殺気が充滿していた。

「どこのサメか知らんが、オオナミ・コーポレーションを敵に回すことの重大さ、わかっているのか？」

リングリングはボンネット上のシャークハンターに拳を向ける。

「サメを狩るなどとバカげたことを」

「それはどうかな」

シャークハンターはシャークオーラをカンブリアオーラに変換する。

「これからお前は、そのバカげたことを言ったサメによって殺されるのだ」

シャークハンターの腕が、青銀に光った。

これから地下駐車場で繰り広げられる、サメ同士の戦の青信号であった。

「SHARDENS！」

シャークハンター、いきなりの先制攻撃！ カンブリアシャウトと共に海時の手から放たれるのは、古の海洋生物アノマロカリスを模したカンブリアオーラ弾！

この技は古代武術カンブリア殺法の基本遠距離技、アノマロ・シュート！

リングリングは跳躍しつつ、アノマロ・シュートを飛び越えた。

着地点はシャークハンターにいるボンネット。

機敏！ 跳躍からの反撃パンチだ！

シャークハンターは後方へ飛び、これを回避。  
コンクリート床に降り立ったシャークハンターへ、リングリングがさらに仕掛ける。

見よ。リングリングのシャークオーラが、右手に集中していくのを。

それはドーナツめいた形状を取り、一つのアイテムを生成した。

あれは——輝くリング状の武器、チャクラムだ！

テンシ・シャークの捕食者たるリングリングは、自身のシャークオーラからチャクラムを形成することができるのである。

内側を取っ手の付いた直径六十センチのテンシ・チャクラムを持つリングリングが、ボンネットを蹴る。

「俺のテンシ・チャクラムで貴様は輪切りのキュウリとなるのだ、シャークハンター！」

藪から飛び出す狂乱肉食シマエナガのごとく、リングリングがシャークハンターを狙う！

サメと出会ったことのない一般の方々に説明するため、比喻として肉食シマエナガを用いたが、そのチャクラムはシマエナガのくちばしよりも確実に鋭い！

「SHARDENS！」

シャークハンターは古代武術カンブリア殺法の回避技、エビゾリで対抗した。

太古味ある回避動作でチャクラムの刃から免れる。

「！」

エビゾリによって体表にカンブリアオーラを覆っていたシャークハンターは、リングリングがさらにチャクラムを振るってくることを感じ取ることができた。

シャークハンターのあごの下から突き上げるような、テンシ・チャクラム。

背中を後方に反ってチャクラムを避けたシャークハンターは、隙のできたリングリングの胴体に痛烈なキックを放つ！

「ウボーッ！」

ダメージを喰らった直後のリングリングへ、シャークハンターは容赦なく追い打ちを続ける。

「SHARDENS！」

殺意を込めた狩人の左ストレートがリングリングを捉えた……！

……かに見えた。

「——又ウウ目くらまし！」

直射！ リングリングのチャクラムがまばゆく光った！

シャークオーラを込めることで、このテンシ・チャクラムはフラッシュユするのだ。

突然の光により、ホワイトアウトするシャークハンターの視界。

サメ同士の戦いでは、ほんの数秒の行動の遅れが生死

を分ける。

直接的な攻撃手段とするには物足りないものの、このチャクラムの光は立ち回りにおいて、リングリングの大きな武器となった。

「真つ二つだあーッ！」

視界を取り戻したシャークハンターの目前に、リングリングのテンシ・チャクラム！

危険！

「グッ……！」

間一髪、シャークハンターは白羽取りで近接用チャクラムを抑えた。

両手をチャクラムの防御に費やすシャークハンターに対し、相手はチャクラムを持っていない左手が残っている。

「ハッハー！」

リングリングの左フック。

顔面で受け止めたシャークハンターに、無視できないダメージが入った。

口の中が切れ、鉄の味が舌に残る。

この立ち合いは不利だ。

シャークハンターはローキックで相手を牽制。チャクラムの力が緩んだところで、彼はリングリングの側面に回った。

右腕を伸ばし、近距離からのアノマロ・シュート。

戦い慣れたリングリングは、テンシ・チャクラムでこれを弾く。

だが、このアノマロ・シュートは罠だ！

アノマロ・シュートを撃った体勢から即座に腰を落としたシャークハンターは、チャクラムを防御に用いた一瞬の間を付き、リングリングの懐に飛び込んだ。

思惑に気づいたリングリングがチャクラムを敵に振り下ろすよりも、

「SHARDENS！」

シャークハンターの方が速い！

カンブリアオーラを乗せたナツクルが、リングリングのみぞおちを抉る！

殴り飛ばされたリングリングは、地下駐車場へ来るために使っていた会社の車に激突。プリントされていた、オオナミ・コーポレーションの社章にめり込んだ。

大打撃である。

リングリングは動かない。

シャークハンターが、彼にとどめを刺すべく動き出す。リングリングはこのまま倒されるのか？

(……ククク、バカめ)

シャークハンターの足が上がるのを見たリングリングは、内心ほくそ笑んだ。

たしかにこの一撃は痛かった。しかし今、彼が反撃に転じることができぬほどに、弱っているように見せてい

るのはブラフだ。

油断したシャークハンターが自分に攻撃すべく近づいたその時、テンシ・チャクラムの光でヤツの目を潰すためである。

いくらシャークハンターといえども、至近距離で強い光を浴びれば目がくらむ。

そうなればこちらのもの。相手が悶絶もんぜつしているところに、鋭利なテンシ・チャクラムでヤツは輪切りのキュウリだ。

シャークスーツを切り裂き、四肢を一本ずつ切断してやる。

リングリングの企みも知らずか、前進してくるシャークハンター。

「……ハッハッ！」

勝利は目の前だ。

ここぞとばかりに、リングリングの武器たるテンシ・チャクラムの光が放たれる……！

「……な、なにッ！」

リングリングの予測通り、接近してきているシャークハンターではある。

だがしかし——なんたることか！

彼は後ろ歩きの恰好でもって、リングリングに迫ってきていたのだ！

目くらましの光を直接見なければ、視界を奪われずに済む。これは理にかなった後ろ歩きだ。

敵のフラッシュ妨害に適応するシャークハンターの、驚異のシャーク学習能力！

予想の範疇はんちゆうを超えた行動に慌てるリングリングに、後ろ向きに襲いかかるシャークハンター。背後に立った人間を蹴り飛ばす馬のごとく、リングリングに後方シャークキック！

「ウボーッ！」

くの字に曲がったリングリングは、同じくくの字に曲がった車のドアごと、車内の床に叩きつけられた。

壊れたドアの上で仰向けになったリングリング。それを冷酷な瞳で見下ろすは、地獄の狩人シャークハンター。

彼は右腕に力を溜める。

すると、おお、魚群のようなシャークオーラが、シャークハンターの腕を青銀に光らせていくではないか。

「……SHARDENS！」

よりカンブリアオーラを溜めて発射したアノマロ・シユート、すなわち、ダイアノマロ・シユートが、オオナミ・コーポレーションの車内を青銀に染め上げる！

「ギエエエエエッ！」

地下駐車場に響く、サメの悲鳴と爆発音。

「サメは狩る」



かくして、違法取引のために訪れた暗黒サメ組織の車は爆散し、邪悪なサメであるリングリングも、アンモニア臭を上げて蒸発した。

#### 海時―IV

靴を履き、家を出た海時とハレは、玄関の方へ振り返った。

ドアの前で、にこやかな大悟が二人に手を振る。

「また会おうなー」

「うん、またね」

「ああ」

大悟と別れ、沈む太陽とは逆の方向に歩き出す海時とハレ。

「久々に海時の顔が見られてよかったよ」

「……俺も、二人に会えてよかった」

「噛みしめるように、海時は言った」

「少し、昔を思い出せた。まだ、俺がここにいた時のことを」

まだ一年も経っていないのに、もう遠い彼方のことのように感じる。

二度と戻ってこない、あの日々から。

サメのことなど何も知らなかった日々から。

「……うーん、なんというかな」

どこことなく物憂げな友達の姿を横目にしたハレが、口を開いた。

「海時が元気になってくれたんなら嬉しいよ。僕も大悟も」

「……感謝する」

「相変わらず、かったい口調だよねえ」

苦笑するハレ。

前方にバス停が見えてきた。

「あと三分か」

時刻表を眺める海時。

ブロブロボロ……

夕焼けをバックに、ウエノシティ東部行きのバスが現れた。

「じゃあ、俺は師匠のもとに帰る」

「うん」

バスに乗る海時の背に、ハレは声をかけた。

「また今度な」

「ああ」

整理券を取った海時が前の席に座り、  
ブロボブロボ……

バスが動き出す。

明日からは、また、シャークハンターとして生きるこ  
とになる。

それは、すべてのサメを狩るという復讐の道。

バスの中、海時は両手を見つめる。

窓から差し込む夕焼けで、真っ赤に染まった両手。何  
体ものサメの血で、真っ赤に汚れた両手。

「……」

一番新しく狩った邪悪なサメ、リングリングのことを  
思い出す。あのシャークノイドのみならず、自分は数々  
のサメを狩ってきた。

殺戮者。シャークハンターとしての、サメとしての所  
業を一言で表すなら、これが適格であろう。

それでも。

(……俺は、まだ人間性を失っていない。失ってはいけ  
ない)

強く自分の心に念じる。自分は、誰彼構わず牙を剥く、  
凶悪なサメと化してはいない。

それは、今日久しぶりに出会った友のおかげだ。

自身を捕食したイワシ・シャーク因子に吞まれて自我  
を失っていた俺を止め、戦い方を教えてくれた師匠のお  
かげだ。

故郷へ来た目的は、休息だけではない。イワシに負け  
ぬ自我を作り上げるためでもあるのだ。

バスの中、海時は軽く深呼吸する。

近いうちにやってくるであろう次なる戦いに、海時は  
身を震わせた。